

海 (かいし) 市

No. 31

● 詩

- 02 前田 勉 ガラス窓
06 横山 仁 生活の柄 (25)

● エッセイ

- 08 細部俊作 『ルポ 希望の人びと』を
読んだ
12 佐藤ただし 水田とツバメ (29)
19 横山 仁 雑記 (31)

● コラム

- 16 前田 勉 ブログ「陽だまりの中のなか」より

ガラス窓

前田 勉

人通りの少ない

裏通りに面したカフェで

ずっと外を見たままの人がいる

冷え切った梢の小さな揺れか

忙しく跳ね動く雀か

かなたから舞い降りて来る雪花の行方か

それとも

重ねてきた時間への訪いか

外光に覆われ影となったその人の後ろ姿は

そのまま

窓枠の空間に貼りついたように
動きが無かった

どこにでもある

ほんやりとした記憶の中で巢食ってしまったような街
馴染みのない街

生前

住んだ記憶も薄いと言っていた

父

の生地

その中に包くまれたまま

たよりない支点は

父の生を

はねかえすことも出来ないまま

ただ巡り進むことを

重ねてきたのだろうか

向いの

小さな雑貨店の色褪せた幟が
風にバタついている

「今日も一番〇〇商店」

問いかげられることを拒むように

今日が

今日は

今日も

と

ひと文字だけが

風から逃れて

喘いでいる

カウベルのドアベルが鳴って

若い青年が入って来ると

窓の外を見ていた人が

振り向きながら

軽く右手をあげて笑む

眉の濃さと目元が

青年とそっくりな顔立ちであった

一緒に暮らすことの少なかった

祖母と父が

波打つクラシカルなガラス窓に

映っている

生活の柄 (25)

横山 仁

コロナの対流式石油ストーブに
マッチで火をつけ 薬缶やかんをのせる
加藤剛主演の「大岡越前」(時代劇専門チャンネル)では
佐竹の人飾りがでている

冬の朝

障子を開け

きよしの雪寄せをみる

*

外出しない日

無精髭のお鈴りんが

世界とつながる言語になる

* 「佐竹の三味線堀の上屋敷では、元朝から七日まで、

表門外の敷石の上に、左右二側に足軽が三人ずつ、
行儀よく立っている。(中略)これが人飾りといっ

て、松飾りの代りなのであった。」(三田村鳶魚『江
戸の春秋 鳶魚江戸文庫15、中公文庫、一九九七年』)

『ルポ 希望の人びと——ここまで来た』

認知症の当事者発信——を読んだ

細部 俊作

生井久美子著

二〇一七年朝日新聞出版発行

認知症であることを個人や家族の範囲内に閉じ込めておらずに、偏見や困難を広く社会の課題として考え、いち早く行動していたのは、オーストラリア人女性クリスティーヌだった。彼女自身アルツハイマー病に冒されていた。二〇〇一年に国際アルツハイマー病協会（本部：ロンドン）が開催した国際会議で講演し、自分が認知症であることを公表した。

二〇〇四年、この国際会議が国内では初めて京都で

開催された。自分の病気を明らかにし、同じ病で苦しむ人たちに、ともに手をつなごうと訴えたことは、当事者のみならず日本の社会全体にとっても大きな転機点となった。欧米から参加した人たちとともに、国内から参加した日本人当事者が、演壇から聴衆に向かって、病からくる不安や葛藤を語り、「自分らしく生きたい」と訴えたのだった。このときを境に「認知症になつた本人は何も分らない」という、それまでの常識がくつがえされることになった。

この会議にクリスティーヌは夫とともに参加したが、二人の発する言葉は、会場の本人や家族を勇気づけた。

・認知症になると「心が空っぽで、何も考えられなくなる」というのは偏見によって引き起こされる「社会の病気」です。偏見をなくす闘いでは、私たちを目に見える存在にすることが大切です。

・病気は変えられない。でも自分を変えられる。

・社会の弱者と同様、私たちをどのように受け入れてくれるかにこそ、みなさんの人間性と社会の成熟の尺度がある。

ちょうどこの年の一二月に国は「痴呆」という呼称を「認知症」に変更した。

*

このルポのなかで、本人の苦悩がもつとも切実に響いたのは、五〇代の人の次のような言葉だった。

・人生には終わりがあつた。いつか自分のことも分かんなくなる日を覚悟した。もう自分の名前が書けない、計算ができない、時間がよくわからない、運転は諦めた。できないことがどんどん増え、もたつく自分、おろおろする自分が情けない。もっている物がどんどんなくなるような不安、自分が壊れていく挫折感。まだ話すことなら、思いを語ることなら、まだできる。

「絶望を語り合える希望」と言った人がいた。ようやく仲間と語り合えることの中に希望を見つけたと。

国際会議が吹き込んだ新しい風をはらんで、彼らは、自分の病気や自分たちの思いを語り始め、交流す

る場を作りはじめた。地域を越えて小人数でもつながり、自分たちに合ったやり方で自分たちの苦悩や思いを語り合い、地域へ理解を広めていこうとしていた。

たとえば本人、医師、作業療法士がトリオで語り合う講座、本人、家族、支援者など七人が参加する会議、認知症に関する勉強会、本人のブログ立ち上げ、三人仲間二組が同じ会場でリレー式に語り合う座談会などなどだった。現役の人、退職、若年退職した人など多様な人が参加していた。彼らはこうした場を渴望していたのだと思う。この動きは関東や西日本で広がり、札幌、仙台にも波及した。そのなかで彼らは次のように発している。

・社会にある偏見を自分も信じ込んでいた。この二重の偏見が生きる希望をも覆い隠してしまう。そんな誤解、偏見をなくしていきたい。

・僕が皆のことを忘れても、みんなが覚えていてくれる。だから忘れたつていいじゃない。

・記憶ができなくても記録はできる。(ICレコーダーやタブレット端末、メール、パワーポイントなどを使って)

・人間の価値は有用性で決まるのではない。何か
ができなくても人はそれ自体尊い。

・私たち抜きで私たちのことを決めないで。

・認知症になった当事者に聴かなきゃ認知症のことは分からない。自分たちにはかできない役割がある。

・希望を知ること、希望を信じるのが（自分たち）
医師に求められている。

・認知症の人にとっていい町は、みんなにとっても
いい町であるはず。

各地でのこうした動きの中で、核になる数人が集まって、全国的な当事者団体が必要だと語り合った。当事者だからこそ気づいたこと、試行錯誤したことをもとに行政に提言し、施策に反映させたい、そのためには個々人でやるよりも団体で当たった方が効果的だと考えたのだ。「空白の期間」への対応も課題の一つだった。とくに現役で働いている若い人の場合は、①自身で症状に気づいてから受診するまでの期間②認知症と診断されてから介護保険サービスの支援を受けられる年齢（四〇歳）になるまでの期間は注意が必要と

される。これらの空白が長ければ長いほど症状が進んでしまふ心配があるからだ。症状が軽い場合は、職場など周りからそれと認識してもらえないため、支援の必要性を理解されにくいという背景もあった。

認知症本人による当事者団体「日本認知症ワーキンググループ（JDWG）」が二〇一四年一〇月に結成された（注）。京都での国際会議以後、各地で当事者たちが集まりはじめてから十年経っていた。彼らは当時の総理大臣や厚生労働大臣とも面談し、政策の提言をしたり、二年後の二〇一六年には、JDWGのメンバーが、厚生省の「認知症カフェの実態に関する調査研究事業」に当事者委員として参加するまでになっていた。

*

著者は一九九四年冬、秋田のある「痴呆病棟」で付き添いの人と一緒に病室の床に布団を敷いて寝泊まりしながら介護の取材をしたことがあった。そのときの病棟の劣悪な環境や患者への処遇を目の当たりにしたことが、このルポを書く根っこにあるようだった。

クリスティーヌとの出会いと京都・国際会議、その十年後の当事者団体結成……と長年にわたって取材してきた。痴呆あるいは認知症といえは精神科病院への入院といった対応をとることが日本では珍しくなかった。そこに人権を軽視する処遇が生まれがちだったことがこのルポに記されている。認知症と診断を受けると、そうした精神医療の傾向とあいまって、本人や家族は偏見の眼差しを受けて肩身の狭い思いをしてきたと思う。こうした旧弊に対して、二〇一〇年ころから始まった本人たち自身による発信活動が疑問符を突きつけたということだと思う。

各地で始まった集まりを経て、何人もの人が相次いで闘病記を出版したり、ウェブサイトを立ち上げたりしているが、そんなところからも彼らの熱量の高さが伝わってくる。

本人たちも医師も口にしてきた「希望」という言葉に、その明かりの強さを感じた。この先、失ったものに気づくときの絶望が何度かやってくるのかもしれない。そうだとにしても、最後に彼や彼女が目にするのは「希望」であってほしいと思った。

注

二〇一七年九月に「一般社団法人 日本認知症本人ワーキンググループ」設立。ホームページによる。

水田とツバメ（二九）

佐藤ただし

・冬の日

冬は鳥を見て暮らしている。朝、窓の外はまだ薄暗く、隣家の小さい窓には明かりが灯っている。隣家に近い植木の冬囲いの近くにツグミが一羽、エサを探して歩いている。一〇日くらい前から冬囲いの上に置いたエサ台のリングを目当てに来るようになった。ツグミやヒヨドリはリングのような果物は好物だが、嘴が細いためか皮を食べるのは苦手のようで、呑み込むのに時間がかかる。そのためできるだけ小さく千切ってエサ台に載せるようにしている。リングの皮と芯を持って外に出るとツグミは近くの柿の木の枝に逃げ、それから作業場の陰に飛んで行った。

家に戻り、ポリバケツを持って畑に向かう。通りは人氣もなく、雪道に犬と長くつの足跡が続いている。道路を右に折れて民家を過ぎると左側に雪に覆われた畑が広がり、遠くに背の高い裸木が枝を空に向かつて広がっている。農業用の排水路に架かった橋を渡ると、冷たい水の流れの中にカルガモが二羽、背を向けて泳いでいる。Y字路を左に折れて歩いてゆくと、道路わきの畑の肥塚にカラスが三羽いる。昨年、この辺にいる二羽のカラスが三羽の雛を育て、今は五羽となったが、そのうちの三羽だろう。

畑の道を歩き十字路を右に折れると、家の畑だ。畑の肥塚の上に家から持ってきたポリバケツを開けると、遠くの杉の木や畑の物置小屋の上にいるカラスがそれを見ていて、私とその場を離れるとやって来る。カラスたちは野菜くずの中から煮干しや魚の頭など、食べられるものを探して見つけると、すぐにその場から飛び去り、思い思いの場所で食べ始める。私はそれを眺めながら家に帰る。

家に戻ると、ツグミとヒヨドリとスズメが冬囲いの周囲に集まっていた。ヒヨドリはリングの皮を啜え、

呑み込めずに首を左右に振り、難儀していた。

朝食後は鋸や鉋を持ち、身支度をして山へ向かう。山といつても家の近くの裏山で、尾根の頂が三〇メートル位の低い山脈だ。家から二軒隣の家の前を右に折れ、沢へ通じる農道へ入り、山の西側の雪に覆われた田んぼ道をゆつくり歩いてゆく。かんじきを使わなくてもなんとか歩いて行ける雪の深さだ。一五分位で山の入り口に着く。ここから山に入ってゆく。

今は誰も山に入る人はいないと見え、藤などの蔓に巻かれた杉があちこちにあり、倒伏し枯れ果てた木も見受けられる。嘗て山の所有者が歩いた道を毎日歩いているうちに、踏み固められた雪の道ができ、その道に沿って杉林の中を登ってゆく。今朝、この雪道をキツネが通ったのか、足跡が尾根まで続いている。その尾根を越えて檜の間を下ってゆくと右側に家の杉林が見えてくる。

山の中は五〇年以上前に植えられた杉が空に向かって立ち並ぶ。木の高さは二〇メートル以上はあるだろう。幹の直径は根元で二〇センチ位から太いのは六〇

センチ位まである。殆ど先端部以外は枝や葉は落ち、真つすぐに伸びている。それぞれの木の枝葉が空を遮っている。林内は普段の生活では得られない豊かな静寂感がある。鋸で杉を伐る音。伐った断面に打ち込む楔の音。木が倒れる音などが冬の林の中に広がり、その音が止むと、また静寂が戻る。

杉の木が密集していたり、枝が落ちて枯れているものなど、不要と思われる杉を伐ってゆく。木の断面を見ると五〇数年の年輪が数えられ、この木たちが過ごした時間がここにあったということが分かる。その時間は私がこの地で過ごしてきた時間と重なるが、木々の静かな存在感と比べると自分が薄っぺらなものに見える。

杉の木の枝や葉が風に揺れる様は、人の（心）のよう、風が吹いたり雨が降ると、（心）はそれに反応して揺れたり、濡れたり、時には折れたりする。しかし木の根元は動かない。（心）は揺れ動く運動で、（自分）ではない。（注）

（自分）は動かない木の根元のほうにあると考えるのが仏教の教えのようだ。もちろん枝や葉が無いと木

は枯れてしまふ。

伐った木はただ土に還すつもりで初めはそのままにしていた。山の土を肥やすにはそこで生まれたものは持ち去らない方が良くという考えからだだったが、これだと歩くのに邪魔なので、今は立木のそばに枕木を置き、担げる長さに伐って枕木に並べ、積み上げている。

倒れた杉の枝の先の方に小鳥がやってくる。スズメよりも小さい鳥で、冬鳥のキクイタダキだ。頭部に黄色と赤の模様があり、羽根はオリブ色の小鳥だが、動きが早く小さいので肉眼では頭部の色彩までは分からない。体長は一〇センチほどで、体重は五〜六グラムしかないという。日本で見かけることができる野鳥では最小の部類という。

鳥の体温は四〇度から四二度と高いというが、元気に飛び回る姿を見ると、この小さい生き物の（体温）が感じられる。このキクイタダキの他にも、山道を歩いているとアカゲラやコゲラなどのキツツキや、ヒガラやコガラなどのカラ類、それにカケスやミソサ

ザイなども見かけることがある。また、リスが杉の木を素早く駆け下りたりしている。

時々、ガンの群れが甲高く鳴きながら杉の木のすぐ上を北へ向かって行く。飛ぶ鳥たちにはここから四、五キロ離れた日本海が見えるのだろうか。

昼頃、山仕事を終えて家に戻る。家では二階の南側の窓のベランダから外にエサ台を吊り下げている。ベランダからは隣家の広い庭が見渡せ、ヤツデやハゼノキなどが植わっていて、ヒヨドリやツグミ、シロハラ、シメなどを時々見かける。

数年前から二階のベランダにエサ台を吊り下げ、隣家の庭にやって来る鳥を招こうとしたが、一向にやってくる気配がなかった。しかし昨年、裏の柿の木のおそばに、さつきを移し、屋根を掛けて冬囲いをし、古くなって食べられなくなったリングゴを柿の木に吊るしておいたところ、今年になってツグミやヒヨドリが来るようになった。柿の木のそばに作った冬囲いが鳥にとっては隠れ家的な場所になったのかも知れない。そこで、使っていなかったベランダのエサ台を雪囲いのそ

ばに吊るしてみたところ、ヒヨドリやツグミがいることに安心したのか、スズメもやって来るようになった。

数日後、家の二階のベランダにこのエサ台を移すと、一羽のスズメが隣家のヤツデの木の上からベランダに飛んできて雑穀を食べ始め、次々にスズメがやって来るようになった。

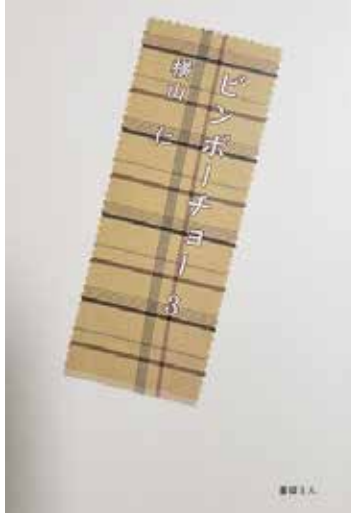
朝から午後まで賑やかに出入りしていた鳥たちも、夕方になると急にいなくなり、それぞれの畦に帰ってゆく。スズメは一軒離れた家の作業小屋の屋根の庇の中に入り、ツグミとヒヨドリは裏山の方へ飛んで行った。

もうすぐツグミやキクイタダキなどの冬鳥は姿を消し、生まれ故郷に帰ってゆく。代わりにツバメなどの渡り鳥が南からやって来る。

(注) 名越康文著・「どうせ死ぬのになぜ生きるのか」を参考にした。

● ブログ「陽だまりの中のなか」より

前田 勉



横山仁評論

『ビンボーチョー 3』

横山仁さんの詩論・評論集『ビンボーチョー 3』が「書肆えん」から刊行された。

2008年8月の『ビンボーチョー 1』、2013年12月の『ビンボーチョー 2』に続く発行。

今は廃刊となって存在しないが、当時所属していた詩誌『匪』の第32号（1981年9月1日）から同40号（1984年12月9日）までに発表した、詩人立中潤に関する評論とその周辺を論じる詩論、文学論である。当時、私も同誌の同人のひとりであったが、立中潤の名を思い出したくらいで、実は横山さんが論じていた内容は全く記憶にない。ただ、彼の論調の凄さは、何よりも広範にわたる視点からの近接の仕方だと記憶している。それは、時には読み手が（当然知っているであろう）との前提で進める独特の文体なせいか、私の

ような俄仕立ての者には辛いもので、よく呑み込めていかなかったのは事実だ。

立中潤という詩人への近接を、「北川透氏の「あんかるわ」でみたことがきつかけだったとおもう。」とあとがきにある。逆算してみると、横山さん42歳の頃になる。この頃、私は何を感じていたのだろうかと思ひ返そうとしたが、何も蘇ってこない。おそらく、横山さんのこの論文を読めず、理解できず……にいたのだろう。

年老いた今、読めて、理解することができらるうか。心もとないが、チビチビとページをめくってみようかと少しは思ったりしている。

以下、冒頭部分を引用する。

立中潤ノート

(1)

自死する1日まえのハガキに立中潤はかいてる。

「もう間もなく〈おれ〉の詩も終焉するところになるだろう。谷川雁なら『殺す』とゆーかも知れないが、〈おれ〉はゲンシユクな気持ちと、ある寂しさをもってそれを受けとめようと思ってる。(中略)詩が終焉したら、ヘタクソな文章ながら、批評の方で自立しよう(?)と思ってる。」

詩の終焉とはどういうことか。そもそも詩とはなんなのか。この問いは、詩になにをもとめるのかという問いと重なるようにおもえる。たとえば近代詩の創始者といわれるポーにとって「言葉の詩とはつまり『美の韻律的創造』だといえよう。その唯一の判定者は美意識」でなければならなかったが、それは科学が自然を即物的にするとか、真理の追求は散文がまさるなどとかんがえたからで、ポーは「あらゆる詩の究極の目的は真理であると考えられている。すべての詩作品は教訓を垂れるべきであって、作品の詩的価値はこの教訓をもって判断されなければならない」といった

情況のなかで「天上の美を我がものにしよう」というように、詩を手段から解放し、自立させるために、非詩的なものを追放しようとしたのである。つまり、現実にたいして、〈反〉近代的な、意識的な抒情で抵抗する（させられる）のである。小林秀雄が、ユーゴーでもって素朴な詩人の時代は終わったといい、ボードレールの思想について「詩は何かを、或る対象を或る主題を詩的に表現するものではない。詩は単に詩であれば足りるのである。そういう考えである」（『近代絵画』）というとき、このような態度に言及しているのである。

お問合せは「書肆えん」横山さんまで。

なお、「1」は定価600円＋税、「2」は1100円＋税。

著者 横山 仁
発行日 2023年1月12日
体裁 並製本50頁四六判
出版 書肆えん（秋田市新屋松美町5―6）
TEL・FAX 018―863―2681
定価 660円（本体600円＋税）

雑記 (31)

横山 仁

保坂英世さんは、「四季彩」33号で「柿本人麿」についてかいている。人麻呂ではなく人麿という表記の理由にもふれているが、柿本人麻呂といえ、山本健吉の『古典と現代文学』（新潮文庫、昭和54年25刷）で高く評価していたぐらいいし記憶になかった。「人麻呂と言えば、誰しも斎藤茂吉のあの大冊が思い浮ぶであろう」とあり、ネットで調べてみると、なるほど茂吉全集では、15巻～18巻を占めていた。

あらためて「四季彩」32号をみると、「水底の歌」では茂吉にもふれていて、「斎藤茂吉の文章自体が古いし、引用するものはさらに古い」ということだった。梅原猛氏については、仏教関係のものは何冊かよんでいる、「水底の歌」は、名前はしっていたがとくべつ

よみたいとはおもっていなかった。保坂さんの要約でその内容を知ることができたが、ただ、保坂さんの文章では人麻呂の歌についてはほとんどふれられていない。山本が「私は日本の詩の自覚の歴史における三つの頂点として、人麻呂と世阿弥と芭蕉とを挙げ」という歌については、梅原猛氏や古橋信孝氏（『柿本人麿』）はどう評価していたのだろうか。正岡子規によれば、「人麿ののちの歌よみは誰かあらむ征夷大將軍みなもとの実朝」というから、いまさらか。

こういうきっかけでもなければなかなか開かない小西甚一『日本文藝史』1巻（講談社、1993年7刷）では、

「柿本人麻呂に対しては、両極端の批判がある。そのひとつは、人麻呂を『歌聖』と仰ぐものであり、万葉時代における最高の歌人であるだけでなく、和歌史ぜんたいを通じてもやはり最高の歌人だとする、斎藤茂吉・島本赤彦・土屋文明など、アララギ派の歌人たちがこの立場であり、万葉学者として最高水準の業績をあげた澤瀉久孝もこれに同調している。

他方、人麻呂は宮廷の御用歌人にすぎず、その作品

は空疎な内質をことごとしい修辭で飾りたてたものだと論じたのが長谷川如是閑であった。これに全面的な賛意を表した研究者は無いらしいけれども、マルクス派の古風なイデオロギイをもつ国文学者のなかには、部分的共感を示す向きが少なくない。」

いろいろな見方があるものだ。

このあとで、山本の「柿本人麻呂」(28ページある)をみてみたら、長谷川如是閑についてもふれていたし、「水底のうた」でも、如是閑などいろいろな人名があげられているので、小西の解説のようなことはふまえられていたとおもえる。

『古典と現代文学』の、一部だけが再読して、以前と同じように教えられるものが多くあった。次の西行もふくめて、和歌を勉強しなくちゃな。

*

「密造者」では、小峯秀夫さんの「再説 偽伝西行」が始まった。西行についてまとめたものをよんだのは、吉本隆明の「西行」(『吉本隆明全著作集』7「作

家論I」所収、勁草書房、昭和46年5刷)がはじめてだが、(小林秀雄の『無常といふ事』だったかなともおもったが、いま文庫本がみつからない。文藝春秋で出した『無私の精神』(昭和42年4刷)には、「ドストエフスキーの生活」などとともに収録されているので、後でよむことにする。文庫本2冊の『本居宣長』も未読だな)その後、何冊か西行本をよんでいるが、小峯さんほどの思い入れがないか、ほとんどおぼえていない。そこで、この連載?で復習したいと思い、西行とは直接関係ないかもしれないが、気づいたところをメモした。

たとえば、「いわゆる天孫降臨で、ここに天皇の正統性が確信されたわけである」(「密造者」第115集)という。だが「確信」したのであるうか。いわゆる「天皇制」にかんしては權威と権力の二重構造が云々されていて、たとえば小名木善行氏は、「結び大学」などで「シラス」と「ウジハク」という言葉で説明しているが、小峯さんの文章では、この構造がいまいいような気がする。

ヤブーの質問箱にあったものより。

(引用開始)

(dev***** さん 2012/9/6 23:16)

シラス,ウシハクという古語を使って天皇統治の本質を1600字以上で論じてください。よろしくお願ひいたします！

ベストアンサー

歴史好き rekisi_zuki さん 2012/9/7 15:18

天皇の統治の根幹は「シラス」という言葉にある。これは、日本神話に基づく思想で、「ウシハク」と対をなす。「ウシハク」とは、土地や人民を君主の私有物とみなしている点で、君主独裁の本質を備えたものである。一方、「シラス」とは天皇が公平に国を統治するということ意味で、天皇を觀念上国家権力の頂点にいたたくことで天皇の權威に基づいた公平な国家権力の運

用を目指す類のものである。

(引用終わり)

ちなみに、記紀については、邪馬台国があったのは関西だの九州だのという歴史屋ではなく、小生は飯山一郎氏の史観に信を置いている。以下、「放知技」での発言。

(引用開始)

「あと、仁徳天皇については、日本書紀と古事記の記載が全てです。

日本書紀と古事記は、百済から渡来した天武天皇が編纂を命じた「正史」という名の歴史物語です。

つまり、日本の歴史は天武天皇から始まりました。

ですから記紀に書かれた天武以前の歴史は、『百濟本紀』など百濟三記の記述と、近畿近辺の豪族たちの口伝歴史を混在させた物語（神話）です。

天武以前の日本は古墳時代で、豪族たちが台従連衡していました。

その豪族たちの中で最大の勢力を誇っていた首長の墓が仁徳天皇陵としたのは、伊勢松阪の本居宣長の指導で蒲生君平が書いた『山陵志』が最初。これを後代の学者がほとんど検証しないまま、現在に至っている…。

ズバリ言えば、仁徳天皇は架空の存在です。実在した証拠はありません。」

「日本書紀の趣旨は…、『百済と組んで大唐国に齒向かったのは天智天皇であり、その天智天皇を倒した天武天皇こそが「親唐」の立場をとる平和主義者で、新しい“日本国”の盟主なのである！』
(そうして百済国を日本列島において再興していった…)」

『『日本書紀』というテクスト＝文章に書いてあること

は、明らかな神話部分を除いて、みな実在した史実だと思ってしまう。

イザサワケ＝ホンダワケ (応神天皇) も、大化の改新も、ウヤヤド (聖徳太子) も、壬申の乱も…、みんな日本列島での史実だと、新井信介氏などは頭から信じこんでいて…『日本書紀』の元ネタが、百済国や伽耶国の歴史だとは露ほども疑われない。

ところが、『日本書紀』が、じつは、『百済書記』(百済の歴史)であることを…『天皇系図の分析について』(<http://amzn.to/2w0dsj2>) という大著が、証明してしまった。

ワシの師匠・山形明郷は、『卓弥呼の正体』(<http://amzn.to/2w0IHol>) は…百済国が朝鮮半島南部にあつたという通説 (テクスト) を…中国の正史の記述を援用して、遼東・陵西に所在した巨大な国家であることを証明しきった。」

(引用終わり)



上図は、『卑弥呼の正体』（三五館、2010年2刷）から

「西行」に話を戻すと、以下の文章は、意味がわからにくいが、現在の米価云々は、余計ではないだろうか。（令和4年度の「米価3年ぶりに上昇 前年産比5%アップ 1万3961円 農水省」とある。）

「左（右）大臣の年間収入（職分田、位田、職封収

入合計）は、現在の米価にしてもほぼ五、六〇〇〇円にのぼるほどで、今の金額になおすと、大臣の年俸は実に一億一千万余円に値する。」

いま、手元に北山茂夫『日本の歴史』4巻「平安京」（中央公論社）がないので、ネットで調べてみると（レファレンス協同データベース <https://crd.ndl.go.jp/reference/>）、「奈良時代や平安時代、貴族の収入は何であったか。どうやって収入を得ていたのか。現代の価値ではいくら位になるのか知りたい。」という質問

に対して、岡山県立図書館の回答で、「貴族の収入は、（1）与えられた土地から収穫されるものすべて、（2）農民からの税、（3）絹・綿・布・鍛など、（4）自由に使える使用人、などがあがる。それぞれについて、位や官職に応じて国から与えられた。平安時代になると、それらに加え、私有地である荘園からの収入もあった。現在の金額に換算すると、最も位の低い貴族

で1500万円程度、最も位の高い貴族で4億円程度であった。」とあった。(2014年12月17日)
 ちなみに「教科書に登場するあの万葉歌人の年収は1400万！？ 歴史上の人物とお金の話」(文＝雨野裾、ダ・ヴィンチ Web <https://ddnavic.com/news/2655095/a/>) というのは山上憶良で、「貧窮問答歌」で知られるが、「その年収はなんと1400万円。中級でも、さすが官僚。庶民が一汁一菜で、玄米に野菜といった粗末な食事をしているところ、彼は一汁五菜。白米に肉や魚を食べている。」

また、warakuweb (「和楽」という雑誌のウェブ版、<https://intojapanwaraku.com/>) で、「平安貴族はサボリーマン！？ 代返やバツクシまで、職務放棄が横行した宮中のお仕事事情」(鈴木拓也氏) のなかに、「官僚たちの欠勤に手を焼いた嵯峨天皇(嵯川式胤模写『東寺・嵯峨天皇御影(模本)』東京国立博物館所蔵)という図版があった。

さらに、「歴史屋」(<https://rekishiyu.com/> 2022.10.09)

という人のブログに、「立派な陵墓を造るよりも…平安時代の名君・淳和天皇が皇室史上唯一の散骨を望んだ理由とは」があり、
 「次世代に愛いを残す淳和天皇は承和7年(840年)5月8日、宝算55歳で崩御されます。

かねがね天皇陵の造営が人民にとって大きな負担となっていたことを憂えていた淳和天皇は、中心の藤原吉野(ふじわらのよしのみ)に自分の死後、墓は造らず遣灰を散骨するよう指示しました。」(注、ネットで検索すると、宝算というのは、「天子を敬って、その年齢をいう語。聖寿。宝寿。」と「デジタル大辞泉」にあった。「普及版字通」では「王の年齢」と、のみ。)

これがシラスということなのだろうが、小峯さんにかけてくる「平安前期の嵯峨、淳和両院は、律令制によって居所のほかに離宮として広大な地域を有し」云々という権力者像とどう関係するのだろうか。

「勸進も東大寺再建に頼まれて東上したのだし」について、童門冬二氏の「東大寺復興に活躍する西行」

をみつけた。このコラムは、「2022年大河ドラマ『鎌倉殿の13人』とはまったく別の視点で、平安時代末期を描いたのが2012年大河ドラマ『平清盛』だ。その放送時に、NHKウイークリーステラにて人気を博した歴史コラム、『董門冬二のメデアイア瓦版』を特別に掲載!」というもの。引用は、2012年12月14日号より。なお、西行に関しては、東大寺復興に活躍する西行、崇徳院の怨念を鎮める西行、山のあなたを憧れた西行、気になる男 佐藤義清、が掲載されている。

(引用開始)

「重源（僧侶）が再興のための資金源として考えたのが奥州平泉の藤原秀衡ヒデタカです。秀衡が管理するゆたかな黄金を提供してもらおう、と思いついたので。そしてこの使者としてえらんだのが西行でした。ふたりは高野山での知りあいでした。西行は承知しました。西行は平家のシンパサイザー（共鳴者・支持者）です。重衡ヒゲタカの行動（*治承4年（1180年）、「南都（奈良・かつての平城京）の興福寺と東大寺の僧兵が反平家の兵を」あげたので、重衡が南都を焼き打ちしたこと）

に胸を痛めています。ですから東大寺再建の一助になうことによって、平家のおかした罪をすこしでもつぐなえるだろう、と考えたのです。」

(引用終わり)

本文のさいごに藤原定家がでてくるが、「いかにも勝ち侍らむ」など、内容がわかりにくかったので、未読だが、もっていた安田章生『西行と定家』（講談社現代新書、昭和60年10刷）をみると、左の歌と、右の歌があり、（左）世の中をおもへばなべて散る花のわが身をさてもいづちかもせむ、（右）花さへに世をうき草になりけり散るを惜しめば誘ふ山水、とあり、定家は「左歌」を勝ちとしたのだろう。（表記は安田本に従った）そして『返す返すおもしろく候ものかな』番の判詞について、『返す返すおもしろく候ものかな』と感激し、『惱ませ』という評言に「よろづみなこもりて、めでたく覚え候」といい、こういう評言は古くは見えないものであるから、自分の歌の姿に似て、新しくいい下されたように覚える、というように述べている。」

僧形としての西行は、亀谷健樹老師にお任せしよう。

小峯さんの文章は、紙数をおさえるため、かなり省略しているのだろうが、小見出しをつけ、ゆっくり内容にもふれてもらえると、西行に詳しくない読者としては、ありがたい。

佐藤義清にかんしては、落合莞爾氏の著作に、佐藤一族と全国の山師？の關係にふれたものがあつた気がするが、探せないのだから次号にでも。

とかいたあとで、亀さんのブログでみつけた。

(<http://toneri2672.blog.fc2.com/blog-entry-701.html>)

(引用開始)

早速、久しぶりに『奇兵隊天皇と長州卒族の明治維新』を紐解き、直ぐに西行を取り上げている、「大室家を保護した佐藤甚兵衛とは」(p.66) という小節を見つけた。この小節を一読すればよく分かることだが、西行法師すなわち佐藤義清は、岸信介、佐藤栄作、安倍

晋三の遠祖なのである。参考までに、以下に小節「大室家を保護した佐藤甚兵衛とは」を転載しておくので、関心を持たれたら同書を直に紐解いて欲しい。西行法師の実像を本邦で初めて公開した貴重な小節だ。

「佐藤義清(1118～1190)は上皇(院)に仕える北面の武士で、紀伊国那賀郡田仲荘の預(上級荘官)だったので、鳥羽(1103～1156)と後白河(1127～1192)の二世にわたる上皇の命を受けて、1140年に出家します。佐藤義清が出家したのは、通説がいうような個人的ないし宗教的理由ではなく、院政を支えるための山林管理を主とする荘園管理人のネットワークりにあつたのです。

法体に身をやつた義清が法号を西行と称し、歌詠みとして世間を韜晦しながら全国を周回して作り上げたのが、「甚兵衛」と称する荘園管理職で、今も全国に六十人ほどいると聞きます。

全国の「甚兵衛」の本家は、陸奥国信夫郡を領して「信

夫庄司」と呼ばれ、飯坂温泉に住んでいたことから「湯の庄司」とも呼ばれた佐藤甚兵衛基治（1122～1180）と言われますが、家系からみて、西行こそ甚兵衛の本家筋で、「湯の庄司」は同族として他の甚兵衛と対等ではなかったか、と思います。

西行の同族で5歳年上の佐藤基治は、奥州平泉の王者藤原秀衡の参謀として知られ、子息の佐藤継信・忠信の兄弟が源義経（1159～1189?）に仕えて奮戦する忠誠に満ちた軍談は、『平家物語』によりよく知られております。」

(引用終わり)

確認してはいないが、菅江真澄が皆瀬村でとまった肝煎も、佐藤家だったような気がする。

「歴史探訪 小安峽温泉」(otoyukurabu.jp/his.html) によれば、

(引用開始)

「この頃訪れた、菅江真澄の記録によると、温泉の家人として佐藤湯左衛門、伊藤多郎兵衛、佐藤久四郎、佐々木重右衛門、市川平助、佐藤久兵衛、佐藤佐兵衛、佐藤五郎作、吉田兵五郎、今野宅兵衛、今野喜内、今野湯左衛門、柿崎十三郎など14戸が記されている。1837年(天保8年)170年ほど前、気仙沼から御救米買付けのため、矢高藩まで行く熊谷新左衛門の書いた「秋田日記」という記録によると、当時の小安温泉の様子が、挿絵入りで詳細に書かれている。湯左衛門家を宿泊基地として、由利地方矢高に行き、米千俵を買付け、文字越えで気仙沼まで運んだと言われている。」

(引用終わり)

とあるが、この佐藤家も西行と同族ではなかったのだろうか。

*

コオロギ醬油も出回っているそう。桑原桑原。自分の命くらい、「自分で守れ/ばかものよ」っね。

あしがき

◆夜、テレビを観ているとフランスのリヨンの居酒屋で楽しくワインや食事を楽しむ番組が放映されていた。リヨンは少し前に読んだアニー・エルノーの「場所」という小説にも名前が出ていた。フランスという国のどこか華やかなイメージとは違い、小説に描かれている20世紀前半から現代にかけての庶民の暮らしぶりが日本と大差はないと思えたのは意外だった。リヨンの居酒屋に憧れよりも親しみを感じるのはそのせいかもしれない。(T)

◆以前からヨーグルトは豆乳でつくっているが、甘酒など発酵食品がからだにいいようで、塩麴も自作している。日本酒や焼酎に甘酒を入れるのも、ブームとのことだ。(J)

◆先日、日本の某放送局に勤めるウクライナ人ディレクター自身のレポートが放送されていた。ロシア語で育ったので、その言語を否定すれば自身を否定することにもなると語り、不条理な惨禍、現実を訴えながら自分とは、祖国とは何かと悩む姿があった。番組の最後に、母国語を選択した彼女は問う。「日本に居る自分とは何か。何が出来るのか」と。その自問の声がずっと残っている。(B)

◆正月、遠来の孫たちとトランプをやった。6歳間近の孫の成長に驚いたが、しかし、焦ったのは自分のこと。「神経衰弱」では記憶が続かず、「いっきゅうさん」では集中力も反射神経も減退していたことを痛感するはめに。これって年相応だべえと開き直ってはみたが…。(S)

「海市」 第31号

2023年3月11日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方